

Zoomによる第6回「法政大学若い教師の集い」と 「新人教師の奮闘記」掲載について

法政大学教職課程センター市ヶ谷相談指導員 戸塚 吉彦

1 「法政大学若い教師の集い」開催の経緯

「法政大学若い教師の集い」は5年前に始まりました。当時、第1回目の開催に向け、3キャンパス共通メールで発信された文章には、“法政大学教職課程センターより、卒業生の皆さんにお呼びかけです。

法政大学に教職課程センターが出来て5年が経ち、現在沢山の卒業生が教職に就いております。この度、この5年間に法政大学を卒業されて教職に就いた方々を対象に、初めての企画として「法政大学若い教師の集い」を行います。若い教師の皆さんで集まり、大学時代の思い出や今の仕事のやりがいや悩みなど、ざっくばらんに交流したいと思っております。”とあります。それまで法政大学にはなかった、教育現場で頑張っている卒業生の皆さんの横の繋がりを創りたいという趣旨で始まったのがこの集いです。

第3回の3年前から、教職課程センター運営委員会における検討を経て、市ヶ谷教職課程センターが中心となり呼びかけと運営をすることになりました。2019年8月23日（金）の夕方、市ヶ谷キャンパスの教職課程実習室を会場に第3回「法政大学若い教師の集い」開催することができました。しかし、残念ながら、一昨年度の第4回「法政大学若い教師の集い」は教職課程センター運営委員会において、感染症対策により「ざっくばらんに交流」することはとても難しいと判断し、「中止」が決定されました。

一昨年度の中止を受けた昨年度と今年度、感染症に対する対策や「密」をできるだけ作らないようにすべきという配慮から、対面での実施は見送りました。代替として、「法政大学若い教師の集い」開始の際の趣旨である「ざっくばらんに交流」を尊重しながら、Zoomによるオンラインでの開催となりました。

2 Zoomによる「第6回 法政大学若い教師の集い」当日の様子

3キャンパス対象の開催へ向け、卒業生へ向けて発信したメールには、“本学出身の若い教師の皆さんで集まり今の仕事のやりがいや悩みなど、ざっくばらんに交流する会を実施しています。一昨年度は感染症対策で開催を中止しました。

昨年度同様に、今年度も対面での実施を中止します

が、「Zoomで若い教師の集い」の開催を計画しております。懐かしいメンバーとの再会、法政卒業生同士の新たな出会いの機会に、ぜひご参加ください。また、該当する卒業生で、このお知らせが届いていない友人知人がいらしたら、この呼びかけを転送いただけたら大変ありがたいです。よろしくお願いします。

詳細は下記となります。

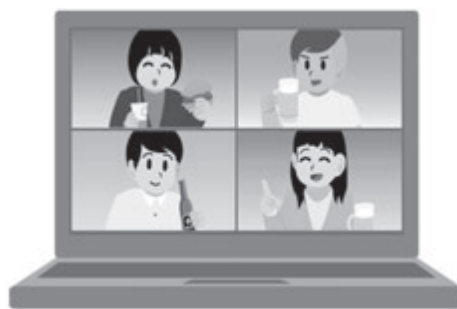
◆ 日時：2022年8月21日（日） 18:00～19:30

◆ 会場：自宅等、密にならない場所からご参加ください

※お手元にアルコール又はソフトドリンクをご用意ください（くれぐれも酩酊しないようにお願いします）。

というものでした。

当日は、10名の卒業生と多摩キャンパスの相談指導員・前田先生に参加していただき、合わせて12名で開催しました。もちろん、皆さんの手元にはアルコールが用意されており、画面越しで乾杯をしました。会の趣旨説明や自己紹介をした後、Zoomのブレイクアウトセッション機能を使い、参加者を2つのグループに分けて「ざっくばらんに交流」を展開しました。各グループの主な話し合いの内容は以下のとおりです。



チーム1

テーマ〔頑張っていること、困っていること〕

Mさん：無尽蔵に仕事を引き受けるのではなく、仕事が効率的になるようにする。勤務校が昼夜間3部定時制高等学校で、外国籍の生徒が多く、言葉を含め対応に困っている。

Iさん：保護者対応。2つの私立高等学校で講師をしているが、1つの学校は成績にシビア。もう1つの学校は日本語が苦手な生徒への対応をしている。いい

意味で学校の違いを日々感じている。

Kさん：授業づくり、部活動を頑張っている。部活動は自分の専門分野外なので、技術指導をはじめ、やりがいを感じられるところまではいっていない。来年度から担任を持つ予定なので、保護者対応についてお聞きしたい。

KSさん：部活動は私自身、高校でラグビーをやっていた、今担当している部活動は専門分野外であるが、基礎的な部分は一緒にためやりがいを見つけている。私も保護者対応についてお聞きしたい。

Sさん：商業高校で商業を担当し、授業づくりを頑張っている。ワークライフバランスをどう保っているのかをお聞きしたい。

生徒と年齢が近いせいか舐められがちなので、どう指導すればいいのかをお聞きしたい。

Mさん：保護者対応は、昔と比べて大変、生徒に対しても保護者に対しても、とにかくよく話を聞くことが大切。信頼関係を築き、すぐ行動に移すことでうまくいくのではないのか。

テーマ 「部活動」

部活動の仕事量をどうするのか

- ・自分の専門外であるため、仕事としてやっている。
- ・元々は仕事として捉えていたが、自分自身が部活動で学ばせてもらっているから情でやっている。
- ・自分自身の存在意義、引率の金額をあげてほしい、部活動の格差（はりつきでいるのか、職員室にいるのか）。

チーム2

テーマ：〔ICT、タブレット〕

- ・生徒や教員ごとの能力の差によって展開の難しさを感じる。どのように活用しているか。
- ・遊んでしまう生徒もいるが、Google Class Room上で課題を配布することで、課題をやらなければ困るという状態にもっていつている。
- ・千葉県の高校では、まだ一人1台のタブレットがない。プロジェクターもない。プロジェクターを自腹で購入して使っている。校内Wi-Fiは整備されているが、生徒の私物のスマホを使用する場合もある。ICT環境の不備が顕著。生徒からは中学校ではICT活用が進んでいたのに、なんで高校に入ったらこんなにアナログなのかといった不満も出ている。
- ・都立高校では、今年度の1年生から全員タブレット配布、3年間で全校生徒に配布予定。週に1日程度TEAMSでメッセージ送信する程度。

・私立高校では、1人1台のタブレットを配布して卒業後も生徒に渡したまま。

・国立の中学校では、端末がない。私立ほどお金もなければ、公立の枠組みからも漏れている。卒業生の寄付頼み。

※校種や地域によってICTの活用や環境の整備にはかなりばらつきがある。現場レベルでは、ICT環境の違いで中学校と高校の断絶が起きている様子。

テーマ：〔部活動〕

令和5年からの部活動の外部的化について

(ア) 活動についてどう思いますか

・部活は楽しいが、部活が終わった後の仕事はやっぱり大変。

・主顧問が一生懸命なので、お願いしている形。

(イ) 部活動指導員ってどんな感じですか？

・部活動指導員が来ている部もある。

・土日の部活が無くなったらいいけど、外部指導員が来てくれるのか。

(ウ) 部活指導がある日の勤務時間は？

・都立高校 6:45～21:00 くらい

・私立高校 8:00～19:00 くらい

・公立高校 定時（部活がない日）

・公立中学校 8:00～20:00 くらい

3 「新人教師の奮闘記」掲載の経緯

昨年度の「新人教師の奮闘記」を読ませていただくと、「先が見通せない」状況下でも、先輩教員からの指導を受けながら、一生懸命に奮闘している姿が伝わってきました。加えて、教職への「情熱」を強く感じました。そこで、今年度も掲載することにしました。

4 まとめ

Zoomによる「第6回 法政大学若い教師の集い」の当日の様子が伝わるよう、できるだけ再現してみました。如何でしたでしょうか。新人教師が様々な悩みや不安を率直に吐露し、先輩教師がそれに対して経験を基に的確なアドバイスをしている様子が見て取れば幸いです。来年度の第7回は対面での実施かZoomの形態か先の見通しはできませんが、皆さんの力をいただきながら育てていけたらと思います。

また、一昨年度から始めた「新人教師の奮闘記」は、「法政大学若い教師の集い」の開催形態に関わらず、今後も継続した企画としていきたいと考えています。

教師になって思うこと

T. I.
(私立I高校外国語科教員)

1. はじめに

教員としてまだまだ経験も浅いが、ここには学校で働いた8か月の中で感じたことを記していきたい。私が勤めているのは私立の中高一貫校なので、公立に比べて特殊なこともあるかもしれないが、これから教員として働く人に少しでも役立てば良いと思う。

2. 教育実習との違い

教育実習との違いとして、まず一つ目に挙げたいのは、教員は教科指導において意外にも孤独であるということである。教育実習では必ず指導教員の下でほとんどのことを行うが、実際に教員として働き始めると、指導してくれる機会がとて減るということを実感した。自分の授業スタイルは自分で決められる上に、どこに重点を置いて進めるかは自分で自由に決められる一方で、だれも何も決めてくれないということも4月当初は不安に感じた。当たり前なことではあるが、実習では発問内容からワークシートまで準備の段階からすべてチェックしてもらっていたのに対し、一人で授業をするようになり、どこが反省点で、どのように改善すべきなのかを自分自身で考えなければならなくなった。自分なりに考えてみたり、先輩のアドバイスを聞きに行ったりはするのだが、そもそも反省点として出てくるのは自分の認識している範囲だけなので、本当にそれだけ改善をすれば良いのかという疑問がのこる。だからこそ授業内での子どもたちの反応や小テスト、定期テスト、提出物などから自分の授業を客観視しないといけないと思うようになり、研究授業などの機会を大切にしようと思う。これを読んでいる中に、もしこれから実習に行くという人がいれば、その機会を存分に活かして自分の授業に向き合ってほしいと思う。

もう一つ挙げておきたいのはやはり忙しさである。実習中もかなり忙しさを感じていたが、教員としての仕事のほんの一部を担っただけだったとわかった。というのも、実習は授業を準備して行うことがメインであったが、今は学年の仕事、副担任としての仕事、分掌（私が所属しているのは教務部）としての仕事、部活など非常にたくさんのごんごんしなければならない。1年目として授業づくりに集中したい気持ちとは裏腹に、本当にたくさんのお仕事が毎日増

えていくので、ほとんど授業を準備する時間がない。私のイメージでは私立学校の教員の1年目は副担任とはいえ、授業を準備する時間や先輩の先生方の授業をたくさん見学に行ける機会が確保されていると思っていた。グループワークなどいろんなアクティビティを用意したり、まだチャレンジしていないことをやってみたりしたいのだが、準備不足になることが怖く、あまり頻繁にできない現状がある。大学生のうちにやっておくべきだったと思うのは、もっと授業におけるアイデアをたくさん吸収しておくべきだったということと、実習が終わっても機会をみつけて色んな先生の授業を見学しに行けば良かったということである。教員になる前に自分の授業のイメージがどれだけできていたか、自分自身の負担も減る上に、クオリティも変わってくると感じている。

3. 私立学校の教員であるということ

私立の学校に就職して良かったと思ったことは、設備が整っているということである。これはもちろん学校によって異なると思うが、ICT機器を含め、環境が整って、デジタル機器を使う文化が根付いている学校が多い印象である。私の勤めている学校は少人数教室を含めて統一された設備が整っていることで、ここに関するストレスはほとんど感じない。環境が整っていることで、授業の準備時間を減らすことができる上に、子どもたちにとってもストレスがない環境が整っている。

私立の特徴として二つ目に挙げたいのは自分に関して評価を受ける機会がたくさんあるということである。授業に不定期で教科主任や教頭が来たり、定期的に生徒にアンケートが行われたりと、評価をされる機会が非常に多いと感じた。もちろん結果からフィードバックをもらえることがあり、次に繋げる良い機会であるのだが、それ以上に私の場合はそういった刺激があることで、毎回の授業のクオリティがある程度均一になっていると思う。ただし、ずっと評価されていると感じることがストレスと感じることもあり、成果が出なかったときや頑張ったのに評価してもらえない場合はどうすればよいらうという不安もあるので、これは長所であり同時に短所であると感じている。

さらに、働き始めて苦労していることは、実習を経験していない中学校で授業をしないといけないということである。私の実習先は高校だったのだが、今は中高一貫校の教員のために中学校の授業も割り当てられる。その可能性があることは最初から分かっていたことだが、4月に中学の授業をしないといけないということが分かったときは、どのように授業を組み立てれ

ば良いのか全くイメージできなかつた。大学生の時に塾講師をしていたが、それも高校生が中心だったので、中学生がどのようなものを求めているのかを把握するのに時間がかかった。私立に就職するということを決めた時点で、中学校の授業を見学したり、様々なところでリサーチをするべきだったと感じている。

4. おわりに

このレポートでは、苦勞していることを中心に記したが、教師になってみて思うのは、毎日に変化し、辛いこともたくさんあるが、楽しいということである。これから教師として働く人は、校種など関係なく、楽しく教員生活をするために、しっかりと準備をしてほしいと思う。

私の奮闘記

R. M.
(私立 K 高等学校地歴科教員)

1. はじめに

私は中学時代の恩師に憧れ、中学校の教員を目指していた。志望していた公立中学の試験には通らず、私学適性を利用して現任校の採用試験を受けた。採用試験にて地理専門の私は、教頭から「本校の地理教育を一から築いてほしい」との熱い想いを受けた。必要とされていると感じたため、本来の志望とは異なる高校教員の道に進むことを決意した。卒業式前日、学校団の顔合わせが行われた。所属する学年団や担当する科目などの詳細な説明を受けたが、私はそこで驚愕する。私が担当するコマのうち、半分が専門外の日本史だったからだ。進路を決めてから、地理の教員としての準備は着々と進めていたが、日本史は全く準備していなかった。そんなこと言えるはずもなく、私にできることはただただ覚悟を決めて、その日から全ての時間を日本史の授業準備にあてることだけだった。このようにして、私の教員生活はあわただしく始まった。

2. 教師の洗礼

私の仕事の大部分は授業準備である。他校に勤務する友人の話を知っていると、この現状はかなり恵まれているようだ。校務分掌は、教務部に配属されたが、明らかに配分されている仕事量は少ない。担任も任されていないため、保護者対応や面談等の業務が回って

くることもほとんどない。しかし、授業準備の時間は全く足りていない。基本的に最後まで職員室に残り、家に帰ってから授業を作成している。私は授業を作ることの大変さを痛感したのであった。最初にどのような活動をして生徒を惹き込み、どこに授業の山をもってきて、どのように終わるか。生徒が眠そうにしていたらどんな雑談をして盛り上げよう、生徒を指名したときどんな答えが返ってくるかが想定できるだろう、この説明で理解してもらえなかったときに別のアプローチ方法としてどのようなものがあるだろうなどだ。考え出したら止まらない。これだけ考えても、授業では想定外のことがおこる。

特に、週4単位の日本史は、まず教える内容を自分が完璧に理解するところから始めるため、想定外に対応できない。そればかりか、準備不足で授業中にぼろが出る。漢字を間違え、プリントも分かりづらいつられる。自信を失うと、声が小さくなり、聞こえにくいとの指摘を受ける。授業が終わると次の授業が控えているため新たな授業準備が始まる。授業の振り返りもままならない。当然、生徒からの信頼は全く得られない。私は、そんな悪循環に陥っている。

また、土日・祝日は基本的に部活があるため、週に一日休みがあればラッキーという感じである。その休みの日も、一日中授業づくりやテスト作成に追われる。心身ともに疲れがたまり、もう辞めたいなど何度も思った。まさに、教員の洗礼を浴びてしまったのだ。

3. 教員のやりがい

今のところ、この仕事を続けることができているが、それは大変なことと同じぐらいやりがいを感ぜられることがあるからだ。勤務を始めてまだ8か月目だが、実はすでにこの仕事の魅力にとりつかれている。それを最も感じるのは、やはり生徒と関わっているときである。授業中は、つたない授業でも話を聞いてくれるし、発問すると手を挙げて答えてくれる。板書するとノートをとってくれる。これらは極々当たり前のことかもしれないが、私はここに大きなやりがいを感ぜている。初めて私が作成した授業プリントを見ながらテスト勉強をしている生徒を見たとき、私が背負っている責任や自分のプリントが彼らにとって十分なものと不安など様々な感情が湧き出て体中が震えたのを覚えている。ただ、それらの感情の中で最も多くの割合を占めたのは、時間をかけて準備したものに生徒が取り組んでくれていることへの喜びだった。教師という仕事のあらゆるところにこういったやりがいが転がっているように感じる。そんなやりがいを集めながら無我夢中で走り続けた結果、今となっては私の授

業が楽しみとか分かりやすいと声をかけてくれる生徒まで現れるようになった。つい先日は「最初は日本史がまったく楽しくなかったけど、今は先生の授業が一番面白いです。」と声をかけてくれる生徒もいた。彼女は一学期中間テストで赤点をとった生徒だったが、二学期に入って積極的に質問に来るようになり、直近の定期テストの点数は80点を超えた。テスト返しの際、点数を見たときの彼女の嬉しそうな顔が印象に残っている。仕事を始めてまだ8か月目でこれだけやりがいを感じられて、とても幸せだと感じる。どんなやりがいがあるか、この先の教員人生が楽しみである。

4. おわりに

教師は「やりがい搾取」と言われることがある。8か月働いてみて、本当にその通りだと感じた。ただし、それはいい意味でも悪い意味でもだ。いい意味で言うと、教師として得られるやりがいはとても大きく、しかもそれは日常のいたるところで得ることができる。生徒と関わることもとても楽しい。しかし悪い意味で言うと、教師はいろいろなものを犠牲にしなければやっていけない。労働時間はとても長いし、土日は部活ではぼつぶれるし、入試説明会や面談など授業以外の業務も非常に多いと感じる。十分な対価が払われているとも思えないが、どの仕事に就いても嫌なことはついてくるだろうし、一年目は大変なはずだ。だから、教師の道に進む決断をした皆さんには、悪いところばかり目を向けず胸を張って全力で頑張ってもらいたいと思う。必ず報われるだろう。

毎日が予測不能

K. K.
(静岡県公立高校地歴公民科教員)

1. はじめに

2022年3月に法政大学・文学部を卒業したKと申します。現在は、静岡県の県立高校に勤めています。一年前と比較すると目まぐるしく毎日が過ぎ去っており、気付けばこの新人奮闘記の催促メールが来ておりました。ここまで、自分の生活を振り返る機会はなかったため、この奮闘記を通して皆様に今現状をお伝えするとともに、9か月間の振り返りをさせていただきます。教員を目指す皆さんに、少しでも参考になることがあれば幸いです。

2. エンドレスハードワーク

本題に入る前に、一つお伝えさせていただきます。私の奮闘記は、今の実情をそのままお伝えさせていただきますのでご了承ください。

まず、教員の仕事をする中で、仕事が終わることはありません。そもそも教員には「仕事が終わる」という概念がなさそうです。私は世界史が専門のため、このことをかっこよく言うのであれば、「エンドレスハードワーク」です。一つの授業を作ったら次の日の授業を作る、それを作ったら学年会計の書類作成、それが終わればPTA通信の作成と保護者への連絡、それが終われば部活動指導と大会の申込金額の振り込み…というように常にやらなければいけない仕事に追われている毎日です。私が特に驚いたのは事務仕事の多さです。今年度は副担任のため、担任業務がないにも関わらず、事務仕事や部活動に圧迫され、教材研究に時間を費やすことができないということが現実です。(県や自治体や学校によって個人差はあります。ご注意ください)。

次に、最近頭を抱えているのが、問題行動の多さです。私は今年度、陸上部の正顧問をしています。2学期に入り、1学年全体の学校生活での問題行動が現在進行形で多発しています。陸上部の1年生も同様に、次から次へと問題行動を起こしているため、常に何が正解なのか分からない中で指導をすることは大きなストレスです。今はとにかく、たくさん経験し、失敗する時期だと自分に言い聞かせて日々を乗り切る毎日です。

この9か月を通して「教員はブラックだ。」といわれる理由を嫌というほど痛感させられる毎日です。常に自転車操業の毎日では、いかに忙しい中で体調を崩さずにいられるかを試されているようです。そのため、授業のない夏休みは本当に天国のようです。夏休み明けの2学期は絶望です。

3. 私が教員をまだやめていない理由

ただ、これだけ愚痴を吐きながらもこのブラックな仕事をやり続けているのは、私が教員という仕事が嫌いではないからだと思います。教員という仕事には付加価値があると思います。それは次のような経験です。何かを一から作り上げそれを形にする楽しさ、人が成長する過程を肌で実感できる喜び、教育を通して誰かの人生の一部になる責任、多くの価値観に触れる面白さ、これは教員だからこそ味わうことができると思います。私は半年以上この仕事をする中で苦しみを多く味わいましたが、それ以上にたくさんの喜びを感じる

瞬間がありました。授業で生徒とうまくかみ合い、生徒の興味を引き出すことができ授業が成功したとき、入学時はやる気を感じられなかった生徒が指導していく中でまじめに部活動に取り組むようになり、大会で自己ベストを更新したとき、フィードバックシートを通して話すことが苦手な生徒とコミュニケーションをとることができたとき、こうした経験を得られたことは何にも変えがたい喜びですし、教員になって良かったと思う瞬間です。「苦しめられるのも生徒、救うのも生徒」。これは、最近私がよく感じることです。生徒の行動に振り回され、悩まされる回数は数え切れませんし、何度も落ち込みました。しかし、それ以上に生徒の小さな成長や変化によって何度も救われました。

また、これは余談ですが、私の学校はありがたいことに若手の教員が多いです。初任の同期が2人、2年目の教員が2人、3年目の教員が2人、4年目の教員が2人います。そのため、周りの先生方に相談しやすく気軽に話ができる環境です。先生方とご飯を食べに行き、悩みや思いを共有できることは日々の癒しになっています。私一人の力でどうにもならないときには、職場の若手の先生方に助けられながら毎日を乗り越えています。

教員という仕事は、こうした付加価値や職場環境に魅力があると思います。教員という仕事を通して得られる経験はなかなかできるものではありません。2章では、なんやかんや文句を言いましたが、大変な分、自分の人生経験を豊かにしてくれているなどと思います。

4. おわりに

教員になることは簡単なことではありません。そして、教員になった後も日々が平和に過ぎていくことはありません。全然ブラックです。毎日が予測不能で、毎日がハードモードです。しかし、それ以上に人とかかわりを通して気づくことや得られるものは多くあります。そして、今もこれからも、この仕事をしたことを後悔することはないと思います。それくらい、密度の濃い毎日を過ごしています。今後も、あらゆる経験をしながら人間的な成長をしていきたいです。ひとまず、来年度はもう少し落ち着いた教員を目指します。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

夢に見た教員生活

J. S.
(横浜市立公立高校商業科教員)

1. はじめに

わたしは、2022年3月に法政大学経営学部を卒業し、現在は横浜市の公立高校に勤めています。法政大学を卒業してからの数か月間、目まぐるしい日々を過ごしています。勤務校は自分が高校三年間過ごした卒業校でもあります。商業の先生になりたいと思った学校で勤務できる喜びと教えることの難しさを感じながら日々教育活動に取り組んでいます。勤務校では、部活動が盛んにおこなわれています。自分自身も高校生の時には毎日部活動に励んでいました。教員として現在は、自分の専門外である部活動の顧問をしています。生徒の成長を感じることにうれしさを覚えます。

2. 新人教員として

週に14時間、5科目の授業を担当しています。4月の最初の授業では生徒よりも緊張しているのではないかと思います。何を生徒と話せばいいんだろうと悩む日々でした。授業も生徒の興味を引くような問いを出せず、淡々と授業をこなすだけでした。先輩の教員に聞くと、自分のことを話すことで生徒も先生のことを信頼できるようになっていくというアドバイスをもらいました。そこで、授業が始まる前の数分間に自分の話をしたり、授業の問いのなかで自分ならこうするという話をすると生徒も問いに対して積極的に答えてくれることや、休み時間に話しかけて来てくれたりしました。気軽に話すことができると徐々に授業中でも携帯をいじり始め、締まりのない授業になってしまいます。私は授業の始まりと終わりには手を止めて挨拶をします。休み時間と授業のメリハリをつけるためです。ここが譲れないというところは自分の信念を曲げずに続けなければならないということが重要であるとこの数か月で感じました。

先日、高校で文化祭が行われました。分掌のなかで仕事が割り振られ教員は私一人で生徒会とともに進行していくものでした。生徒会の生徒も昨年とは担当が異なり誰もわからない状態でのスタート。とても不安に感じていました。いざ準備が始まって試行錯誤の状態。昨年担当であった先生は異動されていて、ほかの先生方にどのような動きをしていたのか少しだけ聞いたのみでした。どうしてもうまくいかないことがあり、分掌主任に相談したところ「私たちはチームじゃ

ないの？」と言われました。そこで私ははっとしました。大学の教職でさんざん勉強していた“チーム学校”。一人でもがいていましたが、私たちはチームであり、互いに支えていくものでした。その時から、わからなければいろんな先生に相談し始めると、教えてくれることや自分では考えもしなかった視点からの物事の見方からの助言をいただき、自分の仕事にも活かすことができました。

3. 授業準備

朝は打ち合わせ、授業が終わると放課後には部活動があります。分掌での仕事や教科での仕事を抱え、授業準備の時間は多いとは言えません。初任である、どんなことをすると生徒が興味を引くのか、自分が精一杯準備したつもりでも生徒が理解しづらいものになってしまうことが多々あります。そんななかで私が行っていることは、同じ授業を持っている先生方の授業見学をさせてもらっています。私の学校では、同じ教科は試験も統一しているので学習計画が一緒です。同じ教科であるとだいたい同じようなところを行っているため、こういう言い方をすると生徒も理解しやすくなるだとか、板書の仕方などを見て、自分の授業の参考にしています。

4. おわりに

先日、先輩教員に言われた言葉があります。“授業準備や部活動などいくらでも怠ることはできる。手をかけた分だけ生徒は返してくれるし、やらなかった分は自分に返ってくる”私は毎回、授業プリントを回収するときにアドバイスを書くことにしています。なぜそのようなことをしているのかというと、同じ授業を受けていても生徒の感じ方、考え方はそれぞれであるからです。一問ずつしっかりみるとそれなりの時間がかかりますが、次の授業や試験ではアドバイスに書いたことができるようになっていくことが多いです。教員のやりがいはそこにあると考えます。生徒の成長を間近で見ることができることです。教員になった4月、授業で小テストを行い、20点満点で6点を取った生徒がいました。その生徒をどうすればできるようになるのか模索していたとき先輩教員に「できなかった子は放課後に残して補習をすればいい」と言われました。その後、何日にもかけて放課後に補習を行った。放課後に補習を行うと、授業準備の時間が減ってしまうため自宅に帰って授業準備をすることもありました。そして、一学期期末試験でその子は平均点以上をとることができ、できなかったものができる

ようになるという成長を見ることができてとてもうれしい気持ちになったことに加えて、やりがいを感じることができました。

教員になるといままでも自分が過ごしてきた学校はこんなにも先生方に支えられてきていたということを実感しています。私の勤務する商業高校では検定取得に力を入れています。検定直前には何時間も補習を行います。そのあとに授業準備をすることはとても大変でしたが、生徒が頑張っている姿を見ると自分も頑張ることができます。結果、検定取得につながらなかった生徒がいた場合にはどう指導すればよかったのか考えています。私は、教員は学び続けていかなければならないものだと思います。授業の中に時事の話をすることや、新しい教育方法を取り入れて生徒の学びの向上へつなげていく。教員として半人前ですが、一教員として未来を切り開くような生徒の力になることができればと考えます。

新人教師の奮闘記

N. S.
(千葉県公立高校地歴公民科教員)

1. はじめに

2022年度にキャリアデザイン学部を卒業し、現在は千葉県で公立高等学校の教員をしています。働きだしたばかりの今年の春には、中1ギャップならぬ新卒ギャップを味わいました。大学の授業や実習と、実際に教員として働くことはこんなにも違うのだと毎日へこたれていました。ですが、教員だからこそ体験することができる生徒との交流や、温かい先輩教員たちのおかげで、おおむね楽しくこの半年間を過ごしてきました。

2. 授業について

私は地歴公民科教員として勤務しています。担当は今年度から新設された地理総合で、1年生を教えています。実習も地理で行ったので、自分自身では地理は得意科目だと思っていました。しかし、毎週2回分の新しい授業を考えるのはやはり難しく、勉強も含めて今でも日々苦闘しています。

初めて教員として教壇に立った時は、その責任感から手が震えてチョークの字がガタガタになってしまいました。学生の際は度胸があると周りから思われていただろう私なので、私を知っている方がこれを読んだら驚くかもしれません。採用試験の模擬授業も、実習

での精練授業も、ただただ「楽しい」と乗り切ってきましたが、生徒のこれからの1年を、そしてその先の人生の根幹を預かるかと思うと、本当にプレッシャーでした。

5月には独自で授業アンケートを生徒に実施しました。中には辛辣な意見もありましたが、ふてくされずに改善点を教えてくれているのだと考えて授業に取り入れました。この経験から、自分の授業は生徒からどのように見えているのかを知るのはとても大切なことだと感じました。このアンケートでは、外国籍の生徒が考査問題にフリガナを付けてほしいという要望を出してくれました。該当生徒がそのような困りごとを抱えていることに気付いていなかったので、今後も生徒からの意見を出させる場を積極的につくっていこうと考えています。

勤務校には外国籍の生徒が多く通っています。私が地理総合を受け持つ5クラス中4クラスに、それぞれ外国籍の生徒が在籍しています。時事問題として生徒から要望が多かったウクライナ問題の話をしたときに、あるクラスにロシア籍の生徒がいたことが気になりました。1学年主任の先生にご相談したところ、3人での面談の機会をつくって下さいました。生徒からは、先生の授業で傷ついてはいないと話してもらい、今後気になることがあれば教えてもらうようお願いしました。ただの教科担当でも周りの先生にご相談すれば面談の機会をつくって頂けることがわかり、チーム学校のありがたさを感じました。

生徒が楽しそうに学んでくれた授業が出来た日は本当に嬉しいです。今後も自己研鑽に励み、良い授業について学び続けていきたいです。

3. 進路指導

勤務校は大学進学をする生徒が大半を占める進学校です。秋からは総合型入試や指定校推薦入試のために面接指導や小論文指導が必要な生徒を個別に受け持ち、放課後などの時間を使って指導にあたりました。私が受け持ったのは、4人の3年生です。2年生の副担任を受け持って1年生で授業をしているため、生徒と深く関わる機会が作りやすかったので、やりがいがありました。自分自身が教職センターで教えて頂いたことを振り返りながら指導を行いました。入試を終えた生徒から「先生に教えてもらえて本当によかったです」と手紙をもらったときは、とても嬉しかったです。

私は自分自身も総合型入試で法政大学に入学していたため、小論文についての知識を仕事でもいかすことができました。教員は、部活動の指導など教科以外で

も自分の得意なことをいかすことができる場が多くある仕事なのではないかと思います。

4. 「そばにいても生徒指導」

初任者研修で教わったことで一番心に残っているのは、生徒指導がご専門の先生から伺った「そばにいても生徒指導」という言葉です。これまで、特に何かをするわけではなくても、気になる生徒がいたら話しかけて一緒にいる時間をつくることを心掛けてきました。部活動中に一人でポツンとしている生徒、授業中に作業ができずにぼんやりとしている生徒など、なんだかひっかかる生徒というのはこの学校にも存在するものだと思います。そんな生徒たちと、会えば世間話をするような関係をなんとかつくってこれたかなと思っています。授業の前後や机間指導の際に声をかけるだけでも、関係はつくっていけるものだと思います。この学校にあなたを気にかけている人はいるというメッセージを、そばにいてことで伝えられたらいいなと考えています。

副顧問を務める部活動では友人がくれず悩んでいた生徒がいました。部活動中には生徒同士で話すことができず私と過ごしていることが多いです。その生徒の件は教育相談がご専門の先生にご相談して、定期的に校内でカウンセリング支援を受けさせることにつなげました。私も毎回同席して面談を受けています。チーム学校として、生徒により良い環境を探していくことを今後も心掛けていきたいです。

5. おわりに

あっという間に過ぎた4月からの日々でしたが、思い返せばさまざまなことがあったのだと思いました。教員の生活は1日として同じ日はないです。それが他の仕事にはない面白さだと感じます。これからも、1日1日を大切に生徒と共に楽しめる教員でありたいと考えています。